

室生犀星の初期習作

—『十九春詩集』とその周辺—

はじめに

室生犀星の初期文学活動の情況に関しては、未だに明らかにされていない部分が多い。例えば、彼の最初の投稿作品が「文章世界」の「河辺の初春」であつた、はじめて「新声」に投じた詩「さくら石斑魚に添えて」が首位に推された、四十三年一月に京に旅し『小曲集』の京都詩編を得た、『小曲集』の詩が書かれたのは十八歳から二十六歳にかけてである、といった数々の誤謬は、あるものはそれ自体は些細な誤りかもしれぬが、あるものは『小曲集』の成立に関連する重要な意味を持つのであり、やはり正しく訂せられねばならない。本稿は初期習作活動のありようをできるだけ事実に見えて把握し、その上で作品分析を通して『抒情小曲集』とのつながりを見ようとするものであるが、立ち後れている犀星抒情詩の研究に何程かを付け加えることができるならば幸いである。

一 散 文

明治二十八年一月、博文館が少年向けの読物として刊行した雑誌に「少年世界」なるものがある。同社はやゝ後れて三十一年に「中学世界」を出すことになるが、「少年世界」はこれよりも更に年少者を対象とした雑誌で、小波・思案・渚山・水蔭らがお伽話・冒險譚・奇譚などを書き、他に風葉・天溪・秋声・春浪らも時々寄稿することがあった。三十五年頃の編輯人は江見忠功（水蔭）、三十六年に巖谷季雄（小波）が代つて編輯発行人を兼ねている。この「少年世界」にも当時の多くの青少年向けの雑誌と

同様「文壇」という投稿欄があり、普通文・漢詩・新体詩・和歌等を募つていた。三十六年にこれが「少年文」に統一され、三十七年には更に「少年文壇」と改称される。後の著名文人では谷崎潤一郎が「時代と聖人」なる文章で「普通文」の三等を（明35・1）、谷崎精二が「少年文」で同じく三等を受け、他に中村武羅夫、百田宗治などの投稿も見える。

ところで犀星の自伝小説「泥雀の歌」の「四、詩集「行く春」」の章に「会計課に一年半ほどあるあひだに、私は『少年世界』を読み、はじめて投書して「河辺の早春」といふ作文が掲載された。選者は西村渚山といふ人だつた。」

という一節がある。この記述は「弄獅子」の「四十八、完結」の章

「私は『少年世界』に投書をして見たけれど掲載されなかつた。三四度出すうちに一篇だけ掲げられたが、題は「行く春」といふしをらしい文題であつた。捜して此処に録したいが何処にも見当らない。『文章世界』の創刊号に「河辺の初春」といふ小品文が掲載されたが、創刊号は明治三十九年三月の発刊であるから、私の十六の年末に投書したものであつた。」

の方が正しく、「泥雀の歌」の「少年世界」は「文章世界」の、「河辺の早春」は「河辺の初春」のそれぞれ誤りである（全体に「泥雀の歌」の方が記憶違いが甚だしく、「弄獅子」の方がより事実に近い）。しかし彼が「少年世界」をこゝに持ち出したのはあながち根拠のないことではなく、「弄獅子」に言うようにこれに投稿した記憶に基くものであつた。おそらくは彼の、最初に活字になつたものであろうその作品は、題名も「行く春」、確

かに三十八年七月の「少年世界」の「少年文壇」欄に発表されている。

行く春

加賀国金沢市
千日町一番地
室生照文

机の上に生けた花も桜でなうて行く春を惜む牡若の一輪咲で我は美しい春が今去るのを惜んで此処公園まで杖を曳いたのであるが桜は名残も止めで樹々の梢は何時しか鬱蒼たる緑衣を着て鶯の声も老いたらしく花と云ふ花は珍らしく唯清い流れの小川に漸く春の色香を偲ぶ牡若独りそよ吹く風に戦いで居る。哀れ四季中に最も人に愛されたる春も刻々迫まつて又暑い夏とはなるのであるア、葉末に宿る玉露も草や樹の涙と我は見るのであつた楽しい春も今行くのである。

即ち「泥雀の歌」は、「少年世界」の「行く春」と「文章世界」の「河辺の初春」とを混同した記述なのである。裁判所給仕時代、会計課雇員の平岡なる人がひそかに泣菫の『行く春』を読んでいたのを知り感嘆した記憶を犀星は記している（泥雀の歌）。文題「行く春」はこの泣菫の詩集から着想したと思われる。また照文という筆名には、当時既に俳句や文章の創作に熱中し、文学の分野に自己の将来を夢見ていたであろう若き犀星の気負いも感ぜられて微笑ましい。内容的には特に見るべきものもないが、「河辺の初春」が文語美文調であるのに対して口語文体によっていること、季節の推移にとりわけ敏感な犀星の、四季の風物への愛着と関心の深さを覗かせていること、「鶯の声も老いたらしく」が最初の投稿詩「さくら石斑魚に添えて」の「老ひ吃りたる鶯の底に沈みし声あらば」を想起させること等が注目される。犀川・兼六公園・金石あたりの故郷の自然に青春の哀傷を託した後の抒情詩人犀星の面影は、確かにこの稚い散文の中にも見て取れるのである。

さて、この「行く春」と並んで犀星の文学的出発を飾る今一つの重要な作品は「河辺の初春」である。明治三十九年三月、田山花袋の編集発行する投書雑誌「文章世界」の「小品文」欄に、犀星は室生残花の名でこの作品を投じた。三十八年一月から右三十九年三月までの投稿欄を持つ主要な雑誌——「文庫」「新声」「新潮」「中央公論」「秀才文壇」「ハガキ文学」等を見ても犀星の名は全く見えず、中央誌に関する限り「行く春」

「河辺の初春」二編がこれ以前の発表作品の全てであった。ところで「河辺の初春」を私が重く見るのは、必ずしもそれが数少しい初期の投稿作品であるという理由からではない。この僅か十行程の稚拙な短文の中に「行く春」以上に後の犀星の、とりわけ『抒情小曲集』時代の彼の、詩の発想方法と主要なモチーフとの原型を私は見るのである。選者西村渚山の「漂渺たる文致、思はず人の心を誘ふ」という選評を受けたこの小品の全文は

乱れ伏せる芦蘆は秋のまゝになれど、水を抜く三寸の青芽を見ずや、破舟を操る舟子が蒼々として濶き初春の空を仰ぎて晴雨を窺ひ、聴て櫓声と欸乃と和して無限の清韻を齎らすを聞ずや。永き冬籠に鬱々たりし頭悩も、一度犀川の下流に下れば、宇宙の大气は爽に頭を拂ひ、沈思せる冬の長き夢は醒めたる如し。東に医王の峯白く、南に倉ヶ岳翠に、秀姿暗に春を黙示して、堤上堤下春草微笑みつゝ、傾く夕日は血潮の如く野に山に水にうつりて、遠村の景、絵くべく、幽に村歌一曲洩れぬ。

というものであつて、十七歳の明治の文学少年ならば一度は書いてみる体の叙景的美文であり、その出来栄えも特に優れているという程ではない。だが、一見取るに足りないこの小品の中にも、まぎれもない『抒情小曲集』の詩人が存在する。『小曲集』を繕く時、我々はそこに全身の歡喜を以て春を迎える詩や、逆に暗い不安におのゝきつゝ冬の訪れを歌う詩を数多く見出す筈である。寒く長く雪の多い北国の冬は、詩人を取り巻く現実環境の暗さと重なり、その情念をますます暗く閉じ込めるものとして受け止められたのであり、春は息苦しい生活環境から彼を解放するものであつた。いわば季節の推移は、家庭を中心とする生活的現実と関連しつゝ彼の生の意識にかゝわつていたのである。春を待ちこがれ、萌え出る草木の芽に「もえよ／木の芽のうすみどり／もえよ／木の芽のうすみどり」（ふるさと）と呼びかけ、「あんずよ燃えよ／あゝ あんずよ花着け」（小景景情その六）と祈りにも似た言葉を投げる詩人——これらは数々の自叙伝で繰り返し語っている虐げられた青春にあつて、その抑圧された生命の吐け口を求める心情の対象への無意識の投射であり、生への祈願の詩であつたと思うが、枯れた蘆の中「水を抜く三寸の青芽」に着目し、犀川辺の春の

風景の中で「永き冬籠に薔々たりし頭脳も、一度犀川の下流にイめば、宇宙の大気は爽に頭を払ひ」とその歎びを語る少年は、後年の詩の発想方法の一端を極めて拙い形ではあるが早くも我々に示しているのである。

「河辺の初春」に次ぐ散文は「新声」四十一年八月号の小説「宗左衛門」である。「過去の日記の中より」の副題を持つ二頁ほどのこの短編は、「私」の見聞した大工宗左衛門とその妻をめぐる話で、花袋の「重右衛門の最後」を模倣したとのことであるが（注一）、ストーリーの上に共通性は認められない。「のろろとした蛇のやうな」脂肪ぎった妻を殺し（と「私」が推理する）、すぐ後に宗左が若い妻を娶る、といういさゝか陰惨な事件に、当時最盛期にあつた自然主義の感化を偲はせるのみで、作品としては注目すべきものはない。むしろ「感情の高い私は会社に入つてから初終胸を圧されるやうな事務に慣れて」といつた部分に、金沢裁判所時代の心境が語られているのが目を引く。

明治四十三年十月から四十四年七月にかけて、十回にわたり雑誌「太陽」が小説と脚本の懸賞作品を募集したことがあつた。小説を露伴・魯庵・荷風・花袋・虚子・宙外・藤村が、脚本を鷗外・小波・逍遙・抱月・蕉が、それぞれ選し、当選作は誌上に発表、当選者には賞金を与える仕組みである。第三回（小説・荷風選）に国枝史郎、第八回（小説・宙外選）に谷崎精二・豊島与志雄、第十回（脚本・蕉選）に佐藤惣之助・尾山篤二郎が応募し、最後の何編に残つて選評を受けている。この第九回は当選作がなく佳作二編を選んだのみであつたが、同誌四十四年六月号に「募集小説を読む」として選者島崎藤村がその選考過程を報じたところによれば、応募作百二十九編のうち最初に七十編を選び、更に厳選して二編を採つた由である。ところで右七十編を幾つかの傾向に分類し短評を加えた中に

「それから私は、何処に居ても直に目につくやうな、若い詩人風の作者にも遇つた。女にしても見まほしいやうな、優しい偶像破壊者にも遭つた。左に作を挙げる。」

として約二十編を列挙した部分がある。この二十数編の中の「家族（室生萍星）」とあるのがおそらくは犀星の作であつたろうこと、次の資料によつて推定できるのである。

「或る時、本屋の店さきで『太陽』といふ雑誌に百円の懸賞を募集してゐて、島崎藤村氏が選者をして居られたので始めて小説であるのやら無いのやら分らないものを、五十枚のたくると『太陽』に投稿した。発表を見ると三人の当選者から七番目に名前が出てゐて、小説といふものは案外僕のやうな人間にでも相当書けるものだといふ気がしたが、それきり小説を馬鹿にして書かなかつた。」（文学的自叙伝）

右の記述は「千九百十四年頃」の文学的交友を記した中にあるものだが、大正三年前後に「太陽」が懸賞小説を募集した事実はなくこれは年代の記憶違い、「三人の」は「二人の」、「七番目」云々は一次の選考で七十編の中に残つたことの、これまた記憶違いであろう。「植民地部落」（弄獅子）のような家族の中で反抗と衝突を繰り返しながら育つた犀星が、その家族を素材にして小説を書くことは充分想像されるし、「若い詩人風の」という藤村の評からもその作風が偲ばれるのである。

このあと『抒情小曲集』時代に入る犀星は久しく小説を遠ざかつた。彼が再び小説に筆を染めるのは『愛の詩集』時代を経て大正八年五月の『抒情詩時代』以後であつた。

「河辺の初春」以後暫く犀星の名は雑誌投稿欄に見えない。その後「金沢 犀星」の名が現われるのは三十九年十二月号「新声」の、小沢碧童選する俳句欄である。この時の一句が、故郷金沢の「北国新聞」を除いて彼の俳句の中央誌に掲載された最初のもので、四十年に入れば三月以降殆ど毎号の「新声」に彼の名が載り、その他「文庫」「ハガキ文学」「中央公論」にも時々散見、四十一年には新たに「趣味」にも稿を寄せることになるわけであるが（中央誌への俳句・短歌の発表は四十一年まで。四十二年には「新声」に投じた詩のみ）、こゝで三十九年から四十二年にかけての有力誌の投稿欄を一瞥し、投稿家犀星の活動とその周囲の情況を見ておきたい。

先ず彼が最も多くの作品を寄せた「新声」は、有明・夜雨・雨情・花外らの作品を載せて詩壇が最も盛況であつた。花外選の新体詩投稿欄からは泡沫・葵村・芳水・露風・柳虹・省吾らが出て間もなくそれぞれ一家を成し、柴舟選の「新声歌壇」は牧水・夕暮・汪洋・芳水・露風を出してこれ

らは柴舟の下で車前草社を結んでいた。四十年七月の「さくら石斑魚に添えて」以後犀星は多くの詩を花外に選ばれたものの、「新声」では終始投稿詩人であつて詩人として独自の地位を得たわけではない。短歌は同七月の四首をはじめ四回にわたつて発表、たゞしこれも特に目立つ存在という程ではなかつた。飯田蛇笏が小説や詩を、生田春月が作文や短歌を、富田碎花が短歌を投じていた頃である。犀星の

稲の園地蔵祭の灯赤し

の一句がはじめて同誌に碧童によつて採られた三十九年十二月、後の『さすらひ』の歌人尾山篤二郎も尾山草の家の号で登場して一首の歌を寄せ、続いて尾山苺・尾山あきの子等の名で作品を発表した。また「性に眼覚める頃」に描かれた金沢の詩友表棹影も四十年四月から名を連ね、以後棹影・表荒涼・表麻沙子の筆名で詩と短歌とに力を入れた。ちなみにこの頃の「新声」俳句欄には、柴笛・月華・一紅・玉洗・虞泉・天嶺・残猪等金沢在住の者が多く、俳句の盛んな当地の伝統的文学風土を思わせるのである。「新声」での彼は室生犀星・犀星の他さいせい・犀星碌人の号を用いた。

「新声」と並ぶ有力な文芸誌「文庫」は、既に浪漫主義時代が去つてその詩史的役割は終ろうとしていたものの、酔茗・清白・夜雨に代り露風・御風・雨情・朽葉・柳虹ら次代の詩人の活躍によつて、なお詩壇の一方の拠点であつた。短歌を御風が、俳句を鳴雪が選し、詩は一流詩人の作も投稿詩も区別なく同列扱いであつた。犀星は四十年八月の三句をはじめとして俳句と短歌とをそれぞれ三回、それに二編の詩(明41・8)を発表している。四十年七月には篤二郎の詩「夕の光」が、同九月に棹影の三首がいずれも同誌では最初の発表作であり、こゝでも三者の登場はほぼ期を重ねている。中では棹影の活躍が目ざましく、棹影・荒涼の名で短歌の他に詩や小説も寄せた。詩「苦き笑」(明41・8)の表木卓、詩「女」(明41・10)の表砂秋とあるのも彼の別号であらう。彼等に遅れて四十一年末の短歌欄には佐藤春夫が現われることになる。

「河辺の初春」を投じた「文章世界」は、「中学世界」から別れた作文練習の投書誌という最初の性格からして、詩・和歌・俳句・小説の他に小

品文・はがき文等の欄を設け多くの文学者を育成した。有明選する詩欄に春月・省吾・禾積(水歌・峰人)、短歌欄に春月・碎花・濤声(東声)・一政、小説欄に加藤武雄・中村武羅夫らがあり、四二年に入つて百田宗治・国枝莞爾(完二)ら加わる。これには篤二郎・棹影の名は見えず、犀星も「河辺の初春」以外は四十年八月の鳴雪選俳句欄に

葉柳や(原句 川添や)川から直に水を打つ

の一句を寄せたのみで、以後大正四年までその名を見ない。ちなみに後の「卓上噴水」の詩友暮鳥は、四十年には既に晶子・夜雨らと並んで目次に名を連ねる体の有望新進詩人であつた。

「文章世界」と同様年少者の投稿専門誌として発行されたものに「ハガキ文学」(明37・10・43・8)なる雑誌がある。「寄書家」として逍遙・桂月・花袋・思案・天溪らの名を借り、米次郎・泣菫・鉄幹らも時に協力した。三十九年に、他の雑誌では投書家にすぎなかつた露風や夕暮が独立の歌人扱いを受けていることから見ても他の文芸誌に比して幾分水準の低いものであつた。小説を花袋、新体詩を花外(最初は久保天随)、和歌を水穂(最初は信綱、次に空穂)、俳句を鳴雪がそれぞれ担当、途中から設けられた口語詩欄を露風が選し、常連に山宮允・松村英一・加藤武雄・谷崎精二・春月(清平)・宗治(舟波・紫舟・舟鷗)・濤声(濤の人)・峰人(水歌)らがあり、佐藤惣之助の俳句、国枝史郎の詩なども見える。最も多くの作品を発表したのは前半の春月と後半の峰人であつたが、これに劣らず著しい活躍を見せるのが表棹影である。四十年四月の和歌欄(空穂選)にはじめて二首採られて以後、殆ど毎号に詩と歌とを書き、その多くは天賞・地賞・秀逸等の賞を受けて上位を飾つた。四十二年四月満十八歳で没したというこの早熟な少年の、最も華やかな活躍舞台であつたらう。犀星が忘れ難い歌として「性に眼覚める頃」や「表棹影氏」に引いている

麦の穂は衣へだてゝおん膚をさすまでのびぬいでや別れん

は、四十年八月に空穂から地賞を受けた作品であつた。犀星は鳴雪の俳句欄に一度投じたのみでその他にはなく、秋人(篤二郎)も短文と歌とを二・三度発表したのみである。

当時総合雑誌に発展していた「中央公論」は「詞藻欄」として詩・短歌

・俳句を載せ、特に詩の欄は泣菫・有明の二大家をはじめ白秋・露風・正雄・秀雄ら新進第一線の作品発表の場でもあつてかなりの重きをなしていた。白秋の「邪宗門秘曲」を含む「新詩六編」(明41・9)や李太郎の「暮春調」もこゝを飾つたのである。和歌と俳句とは投稿欄で柴舟と大谷繞石とが選者、歌では瀟人(瀟声)・碎花・允・楓花(宗治)・岩谷莫哀らが目立つが、俳句では犀星以外後に著名になつた者はいない。その犀星も四十年十二月・四十一年一月・同十月の三回にわたつて計五句を採られたのが全てで、「人物と印象」大谷繞石氏を悼むに「僕の甘ころに」中央公論に発句欄があつて、繞石さんが選をして居られ、僕は一年ばかり続いて発句を投書してゐた。大抵、五六句くらゐ採られ」とあるのは犀星の思ひ違いである。『魚眠洞発句集』の「序文」の「四十句位書いて一句平均に入選した」というのが事実に近い。もつとも四十一年二月の選後評によれば投稿句は千二百五十句、うち選ばれて掲載されたのが百句前後であることから見ても、この俳句欄の選に入るのは容易でなかつたのである。なお繞石は明治八年松江の生まれ、東大英文科を出て俳句を子規に学び、のち四高教授として金沢に赴任、四十二年から四十五年まで英国留学、その後大正十三年まで四高に勤めた人。四十一年に金沢市桜島に転居して居り(「中央公論」による)、この頃犀星の方から訪ねたものと思われ、犀星が同誌を離れた後も長く交際が続いた。

明治三十九年六月の創刊になる雑誌「趣味」は、はじめ演劇や美術を中心とした文字通り趣味的な月刊誌で、間もなく創作・評論を主とする文芸誌の性格を強め、更に「趣味歌壇」(空穂選)「趣味俳壇」(岡本松浜選。後に虚子・松浜の合同選)をも設けて詩歌にも力を注いだ。白秋・露風がしばしば寄稿し、白秋の代表作「室内庭園」、露風の同「沼のほとり」もこれに載つた。歌では夕暮・勇・哀果・牧水らに混つて春月・瀟声・犀星・春夫らが、また句の方では露月・東洋城・水巴らに並んで犀星ら無名の投書家が、それぞれ同列に扱われていた。四十一年五・六の二号に犀星の名を見ることが出来る。

かくして、三十八年七月の「行く春」以後四十二年五月「新声」の詩「夜のしづく」までは犀星の投書家としての活動期間であつた。『抒情小

曲集』の独自の詩風を以て詩壇の第一線に躍り出るのは、「スバル」四十五年十月に「青き魚を釣る人」他三編を発表して後のことであり、この間に少数の官能的情緒詩「尼寺の記憶」(「スバル」明43・2)や「夏のをはり」「ベットに入る前の舞踏」(「創作」明44・10)の発表はあるものの、これまた未だ個性的なスタイルを獲得していないという意味で習作と見なすべく、『小曲集』の詩人犀星の誕生までには約七年の投稿習作時代を要したのである。白秋が「林下の黙想」を、露風が「書写山」を、それぞれ「文庫」に投じたのが明治三十七年、彼等が四十年前半には共に詩壇の新進として華々しく活躍しているのと比較する時、犀星の雌伏期がかなり長かつたことが知られる。投書家としての犀星は、詩の春月・省吾・碎花・増野三郎、歌の橋田東声、文の谷崎精二・中村武羅夫・加藤武雄・倉田白幻(百三・紫水・白源)、それに同郷の棹影・篤二郎らとほぼ同じ時期に出、峰人・一政・宗治・春夫らにやゝ先んずるという位置にあつた。彼が最も力を入れたのは「新声」続いては「文庫」で、「文章世界」「中央公論」「ハガキ文学」「趣味」にも時々投稿、「新潮」「秀才文壇」にはこの頃関係しなかつたものようである。

二 俳 句

金沢地方裁判所給仕時代、「北国新聞」に俳句を寄せていた検事局の監督書記川越風骨や、同じく検事局の赤倉錦風に句作の手ほどきを受け、やゝ長じて四高教授藤井紫影の選する「北国新聞」俳壇に作品を発表するに至る経緯については、彼自身もしばしば書き、幾つかの犀星研究もこれに触れている。同裁判所には風骨・錦風の他に、文の巧みな葛巻桂花・泣菫の『行く春』をひそかに読んでいて犀星を驚かした平岡某、山水画の得意な広瀬某などがあつて、金沢の芸術愛好の風土はこゝにも一つの文学的雰囲気を作つていたのである。

三十六年頃と推定される俳句入門から「行く春」までの三年間に、彼がどのような作品を書いていたかは今日明らかではない。たゞ重要なのは、奥野氏なども強調して居られる(注2)、当時犀星をして句作にかりたてた要因、ないしは俳句創作に當つての彼の意識のあり方であろう。

他に誇るべき何物をも持たないこの少年を支えていたのである。

「行く春」以後中央誌の投稿欄に寄せた犀星の俳句は、私の収集した限り計二十二回、八十五句である。その最も早いものは「新声」三十九年十二月の一句、最も遅いものは四十一年十月「中央公論」の二句でそれ以後には見当らず、発表誌は「新声」「文庫」「文章世界」「ハガキ文学」「中央公論」「趣味」である。短歌の投稿が四十年七月から四十一年九月まで、従つて四十二年の犀星は中央誌では詩に力を注いで、短歌と俳句とは故郷の新聞にのみ発表したことが知られる。

ところで右八十余句の中には、

稲の闇地蔵祭の灯赤し（「新声」明39・12）

林立す五月角力の幟かな（「文庫」明40・8）

乾鮭に頼母子会や漁師町（「中央公論」明40・12）

初空や火の見櫓に輪のかざり（「中央公論」明41・1）

等の、少年らしい興味を以て郷土のさまざまな四季の行事を詠み込んだものの、

枯芭蕉墨汁捨つる窓下かな（「新声」明40・4）

乾鮭や昨柚を焼きし同じ炉に（「中央公論」明40・12）

日旺の尻据ゑてける炬燵かな（「新声」明41・4）

よく卵生む鶏に遣る蜺かな（「新声」明41・6）

と、日常生活に取材してその断片を記録したもの、

縄切れて傾く垣や路の臺（「新声」明40・3）

浜百合や合歓の林の中に咲く（「新声」明40・11）

汽車通す鉄橋かゝる青田かな（「文庫」明41・8）

などに見られる風景・触目の素直な写生、

学寮や顔塗られをる昼寝人（「新声」明40・9）

脳味噌の足らぬ柚味噌の句案かな（「新声」明41・3）

幽霊が首を締めたる布団かな（「新声」明41・4）

という無邪気な諧謔等々、様々な傾向のものが含まれているが、『抒情小曲集』との関連に於いて私が注目したいのは、

周知のように犀星は、後年その子供達に自己の半生を語る形で書いた自叙伝「弄獅子」の中に、「それをはつきりいへば君たちの卑しんでゐる女中といふもののお腹から僕が生れて来たからであつた。……こんな恥かしい厭らしい、よく人に話も出来ないやうな面目ない事実であらうか。」と述べている出生の仕方をし、生後一週間にして他家にやられ、「まるで無学な人間がより集つて他人同士が植民地部落のやうに、一家族をつくりあげて」いる家に育つた。わずかに記憶している実の父母からも「強烈にただの一度も愛されたことがな」く、その継母は「自分を叱る為に生きてゐるも同様」と感じさせる存在であり、そうした家庭で大人を信ぜず反抗と憎しみを抱きつゝ少年期を生きた。学校にあつては教師から「手に負へない劣等生」の烙印を押されて高等小学を中退、貰い子をして育て「行く行くは働かせて楽をする心算」であつた母の意志で、兄と同じく裁判所の給仕として働めることになる。この時の心情も「反抗と屈辱とから妙に昂奮して」（「弄獅子」）あるいは「この官庁で生涯をもみくちやにすることに屈辱を感じ」（私の履歴書）といふのであつて、これまた彼の境遇的な負い目に今一つ負の意識を加えるものであつた。——彼にとつて俳句の創作とはこれら出生や学歴や職業的身分等の負い目を周囲に向つて返し自己の存在を主張する唯一の手段であつた。彼は俳句を作ることによつてますます傲慢になり、上役の命令をも素直に聞かず、ために役所の中を次々と転属になる。が、それを不名誉とも思わず「役人を軽蔑し、母や兄を軽蔑」（「弄獅子」）し胸を張つていられたのは、「自分の生活」として自己を定立せしめるものとして俳句があつたからである。その頃また彼は黒岩涙香の『天人論』や高橋五郎の『宇宙観』などの書物を、意味も解さないまゝに「何かを威嚇するやうな、烈しい気持」（泥雀の歌）で読んでいたという。これも俳句と同様自己の優位を示そうとする稚氣のあらわれではあつた。犀星自伝物の年代の杜撰さにも拘らず、右のような少年時代の心境の叙述に關しては「弄獅子」「泥雀の歌」「私の履歴書」等の間に殆ど内容的齟齬はない。そして後年の彼は「生意氣」「傲慢」「空威張り」等の言葉を以て苦々しく當時を反省するが、「私自身はこの空威張りでやつと助かつてゐた」（私の履歴書）とも言うとおり、俳句と読書による自己主張のみが、

山蘭の蕾もつ頃雪解かな（「新声」明40・4）
沢蟹の穴から水は温みけり（「新声」明40・4）
固くなる目白の糞や冬近し（「新声」明41・3）

等に代表される、季節の推移を主題とした自然詠、および

春菊や乾きし砂に蟻の列（「新声」明40・7）

水馬蛇籠の縄をたぐり行く（「新声」明40・7）

こぼれたる葛啣み去る清蟹（「新声」明40・11）

などの、小さな動物に寄せる興味やその観察である。

先の犀星の出生と置かれた境遇とが、反抗の精神やコンプレックスや、その裏返しとしての傲慢さと共に、強い孤独の意識を植えたであろうことは今更言うまでもない。実の父母に愛された記憶を持たないことに加えて、後年も「やくざ女」「酔ばらひの四十女」（「弄獅子」と書かざるを得なかつた継母の下で血のつながらない四人の兄や姉妹と育つたことは決定的であつた。人はその担つた負い目が重ければなおのこと、それを包み込んで癒すところのものを必要とする。それを持たなかつた少年にとつて唯一の慰めともなり愛情の対象ともなり得たのはおそらくは故郷の「自然」であつた。孤独の慰藉としての自然と言えはささか陳腐に響くが、『小曲集』とその周辺の詩を少しく子細に読むならば、そのことが如何に彼の抒情詩の中で重い意味を持つかに我々は気付くであろう。ややもすれば人は「ふるさと」や「寂しき春」の純粹抒情の名作から直ちに『小曲集』の内容を論じがちである。しかし、同集の主要部分を形成するのは、

うすければ青くぎんいろに
さくも紅く咲くなみに

三月こな雪ふりしきる（三月）

や

秋のひかりにみどりぐむ

ときなし草は摘みたまふな（時無草）

などの、自然の微妙な美しさを繊細な感受性と限りない愛情を以て捉えた作品群なのであり、『小曲集』は一面優れた自然詩集という性格を持つ。

この問題を考える時、「弄獅子」の

「素直さを失つた子供といふものは人間よりも余計に樹木や動物に心を寄せるものであつた。」

ないしは

「貧家の子供であつて絶えず苛められ悲観してゐる者は、何時の間にか自然に近づいて行くその中にはひり込んでゐるものである。」

といったさり気ない言葉は、決して軽々しく見過されてはならない。周囲の人間への不信と反感から目を自然に向けざるを得なかつた少年が、孤独の中でますます感受性を磨ぎ澄まし、草木や昆虫に語りかけ、かすかな四季の推移にも驚きと歓びを見出して行つたその日々を、これらの文章は鮮やかに描いて見せるのである。『小曲集』の自然はある意味で少年期に把握された自然の、詩の世界に於ける再生でもあつた。そのように見て来るならば、引用した「山蘭の」以下三句などは、明らかに『小曲集』の自然詩に直接つながる要素を含むものである。例えば「山蘭の」「沢蟹の」の二つの句には

雪あたたくとけにけり

しとしとと融けゆけり

……

もえよ

木の芽のうすみどり

もえよ

木の芽のうすみどり（ふるさと）

という、「ふるさと」の春を迎えた歓びが聞き取れないか。あるいは

「固くなる」の句には

はや冬のこしなり

海なりは空を行く（十一月初旬）

もはや別れなり

くらくして寒い冬がくるぞよ（わかれ）

と、全身を以て冬の訪れを感じ取り、心までも暗く閉ざされて行く「十一月初旬」や「わかれ」の詩情が響いてはいないか。更にまた「春菊や」以

下の三句には

水すまし

水をすましてきえにけり

きえしまにあらはれ

わがたそがれをさびしうす(水すまし)

や

なにといふ虫かしらねど

時計の玻璃のつめたきに這ひのぼり

つうつうと啼く

ものいへぬむしけらものの悲しさに(夏の朝)

の、「ものいへぬむしけらもの」のあはれや、その命に注ぐ愛惜の情がありはしないか。「私は欲きながら蟻に戯れてゐた。音楽家がピアノに戯れるよりもつと重大な意味があったのだ。」(弄獅子)という、悲しみの眼差しで見つめられたいきものの姿が。

ともあれこれらの俳句に見られる自然への興味と観察、草木のたゞずまいや小動物に寄せる愛着は、確かに彼の後年の抒情詩の中に引き継がれて行く。これに比して

古本屋に我著書見ゆれ秋の風(「新声」明41・3)

双六の伊勢で泊つて詣でけり(「新声」明41・3)

洛陽に入つて酒豪や雪夕(「新声」明41・5)

等の、ことさらに才気を誇示した感のある句は、俳句として手慣れてはいらぬものだがそれだけであつて、犀星の個性も、後の抒情詩に発展すべき何らの要素も見出すことはできない。

なお右八十五句のうち『魚眠洞発句集』に収められているのは先の「固くなる」の一句のみ(注3)、この他では

避暑の宿欄に百島指呼すべし(「新声」明40・11)

の改作かと思われる「避暑の宿うら戸に迫る波白し」を見るだけである。

三 短歌

犀星の最初の詩「さくら石斑魚に添えて」の発表された「新声」四十年

七月号に、これも中央誌への短歌の投稿としては始めてのものかと思われる四首が、選者柴舟によつて採られた(「北陸新聞」「北国新聞」には同年二月以降短歌の発表があるという。未見)。以後「文庫」四十一年九月までに「新声」「文庫」「趣味」に拠つた四十一首が、金沢の新聞への投稿歌を除く彼の初期短歌のはゞ全てであつて、その他の主要な雑誌に当つてもこれ以外には見当たらない。当時の投稿少年にあつては、文学のいづれか一つの分野に専念するという場合は極めて稀であり、詩・短歌・俳句・散文等多くの欄に名を列ねるのがむしろ一般的傾向であつたが、俳句から入つた犀星が、間もなく詩や短歌を試みるに至つたのは、やはり俳句の形式の枠に止まり切れない内的要求もあつてのことであらう。

さて右の四十一首のうち、四十一年の発表になる数首は

ふるさとや姉を真似して菓子箱に蚕飼するなるいもうと

(「新声」明40・7)

雨思ふ日蝶々ともは路傘のしたよりしたにゆきゝしてゐぬ

(「新声」明40・7)

ひとすじの雨の糸繰り天上の星のまどゐの常楽を見む

(「新声」明40・12)

等々、歌の調べをも成さない拙い作(ふるさとや)や、短歌というより俳句的発想の写生歌(雨思ふ日)、明星派流の空想的浪漫歌(ひとすじの)などであつて、未だ定つた傾向もなく内容もいかにも稚い。が、これが四十一年の作になると、犀星の個性をも打ち出し、短歌としての整いをも示すようになる。中でも興味を引くのは、それらの約半数が恋の歌であること、俳句とは異なり当時の犀星の心情を反映して暗い哀傷を帯びた作品が多いことである。

そもそも『抒情小曲集』には恋愛を主題とした作品はさ程多くは収められていない。しかしその八二部Vには、「小曲」「哀章」「わかれ」「雪くる前」「秋の終り」等の優れた恋愛短唱の幾つかがあつてこの詩集を多彩にしているのを見、また同時代の拾遺詩集『青き魚を釣る人』に「朱の小箱」「逢ひて来し夜は」以下十数編の切実な恋愛詩があることも想起される。それらは例えば次の

眼つむりてすみやかに

君をねんじて十字をきれば

熱きもの

ひとすぢのけぶりとなりて

真青の竹をのぼりゆく（小曲）

の如く、彼の抒情詩の中でもとりわけ一途につきつめた想いの激しさと純情さに於いて人を打つものだが、

わが胸にやどるは誰ぞと君は云ふわが手を把るは君にあらざるや

（「趣味」明41・6）

かきくもる空にひとすぢ残照の消ゆるを君とながめある丘

（「文庫」明41・8）

日旺日あくれば哀し一週を君見ずとしも思ふべければ

（「文庫」明41・9）

白き鳥雲累れる蒼そらに消ゆとき淋しおん胸に倚る

（「文庫」明41・9）

等の清純な抒情は、確かに後の恋愛小曲と同質のものを感ぜさせる。明治四十一年当時の犀星の恋愛体験については私は明らかにし得ない。後の『小曲集』時代、犀星が幾編かの詩を捧げた二人の女性お春（石尾春子）・おゑん（村田艶）のことは既に知られているが、新保千代子の実証によれば彼の春子との出逢いは金石登記所時代、その金石赴任は四十一年末とのことであり、従つて四十一年の詩・歌に関する限りその対象は春子ではないことになる。今一人のおゑんは明治二十九年生まれで四十一年には数え年十三歳、彼の最初の本格的小説『抒情詩時代』の、「当時の私の名文」であつた「行く春」（前出）の賞として少年雑誌からもらつたメダルを与えたおひさなる少女がこのおゑんと思われ（注4）こゝに「彼女は、まだ十三ばかり」、「いまから思へば、それは清純な濁りない心からの求愛の芽生えのやうなものであつた。彼女に一日会はなければ、私は暗いものを注がれたやうに、黙つて考へ込んでゐた。一すぢな此思ひは、私を時には衰へさせ、ときにはむやみに昂奮させた。」とあるのを見れば、これらの恋歌の対象はおゑんと推定される。もつとも「弄獅子」の方で、お

愛（おゑん）が「十三くらゐ」の折、「自分は別にお愛を好く程にならずに、自分の親類にお愛といふ娘もある位にしか考へなかつた。」と言ひ、「お愛を見直」し、「速かな愛を感じるやうになつた」のはお愛十八歳、自分の何度目かの帰郷で再会した時であつた、と述べているのも一面では正しく、四十一年当時のそれは淡い異性への憧憬に近いものであつたろう。従つてこの感情が、激しい恋慕や苦しい悩みとして歌われる過程には幾分かの詩的虚構が加わつていゝと見るのが妥当である。おゑんに対する熱狂的な恋が生れるのは、数年を隔てゝ大正三年のことであつた。

わが家はわれを容るべくあたゝかしされども倦みぬ慣れやらぬ君

（「文庫」明41・6）

二十四時つとめに疲れ家にある君に魅せられたゞ生きてあり

（「文庫」明41・6）

の「慣れやらぬ君」「家にある君」も、意味の取り方にもよるが、（犀星の家とおゑんの家は近く常に行き来していたらしい）素直に読む限り虚構といふことになる。

いづれにせよ、俳句では不可能であつた青春の感情の捌け口を彼はこの短歌に求めた。そのことは先の犀星の少年期から青年期にかけての生い立ちの暗さが、表面上俳句には殆ど影を落してないのに比し、短歌の方には鮮明に反映しているのを見ても言える。例えば右二首のうち「二十四時つとめに疲れ」などは、当時気の進まぬ裁判所給仕の職に縛られていた彼の生活の実感であつたろうし、

眠こそわがあらゆるをつゝみたる藪にしあれよ日輪もなし

（「新声」明41・5）

にも、「この官庁で生涯をもみくちやにすることに屈辱を感じ」（私の履歴書）といった閉ざされた未来への不安や絶望が含まれている。おゑんそれは

夜の国眠らぬ草の花あをくうす闇に咲く淋しさに立つ

（「新声」明41・7）

さらさらと棕櫚の葉鳴りにつたひゆくわが悲しみのいと低きうた

（「文庫」明41・8）

あゝ暗きかなしき影を水にして蝙蝠とびぬ夕暮の河

(「文庫」明41・9)

われに憂き冷たき秋の樹々はみなうら葉にそむる悲しみの色

(「文庫」明41・9)

等に見られる甘美な浪漫的感傷の形をとつて表われるのであるが、時として

人間に倦めりこのとき蒼海に死の舟をこぐわが魂を見る

(「新声」明41・7)

とにかくにけふも昏れけりなりはひに疲れしまゝの軀をよこたへて

(「文庫」明41・9)

という生活派的倦怠や厭世に傾くこともあつた。そしてこうした心情の暗さが

強ひぬれば否とも言はでのみてます君もたへざる愁しるかな

(「新声」明41・5)

からかさの雨をさびしき俛れてうら町通る影と影とは

(「文庫」明41・8)

つくつくと生くる愁にあゝ独り死ぬるは淋し君もかく言ふ

(「文庫」明41・9)

等の示すように恋愛短歌にも及び、これを強い哀傷の色で彩るのである。

『抒情小曲集』や『青き魚を釣る人』の恋愛抒情詩が、その清純さにも拘らずある種の痛みや悲しみの暗い影を帯び、逆にそれによつていつそう純粹さを強められているのを我々は見る。それは恋の体験が成就したか否かという種類の問題とはかゝわりなく、出生と生い立ちと学歴の乏しさと貧困と、それら全てを含んでの彼を取り巻く「現実」の暗さの、そしてまたそれによつて形成された心情のありようのなせるわざなのである。例えば

あらはるとなく

消ゆるとなく

ふりつむ我が手の雪を

ああ 君は掻く(雪くる前)

という、それ自体はとりとめもない愛の一場面が、ひとたび彼の詩に組み

込まれるや限らない哀しみの色を帯び、

うれしきことを思ひて

ひとりねる夜はかぎりなきさいはひの波をさまり

小さくうれしさうなるわれのいとしさよ(逢ひて来し夜は)

と恋の歎びを歌つてもそれはどこかいじらしく痛々しい思いをそよる。そうした犀星抒情詩の本質につながる要素を、これらの短歌は既に示しているように思う。

「河辺の初春」や俳句の項で触れた犀星の自然の捉え方を短歌にも見ておきたい。

万樹みな芽を吹くごとし君を見る胸の林に春風のふく

(「新声」明41・5)

さらさらと棕櫚の葉鳴りにつたひゆくわが悲しみのいと低きうた

(「文庫」明41・8)

われに憂き冷たき秋の樹々はみなうら葉にそむる悲しみの色

(「文庫」明41・9)

彼の青・少年期の負い目と孤独を包むものとしての自然の意味については既に述べた。この場合重要なのは、「自然を友として」ないしは「自然への感情移入」といつたありふれた言葉では充分表現し得ない体の、より生^{なま}な、より直截素朴な自己と対象との一体化がそこに行われるという点である。これを『小曲集』に見れば、先の「小曲」に於いて

熱きもの

ひとすじのけぶりとなりて

真青の竹をのぼりゆく(小曲)

と言う時、「ひとすじのけぶり」は「熱きもの」の比喻であるといった観念の入り込む余地を全く許さない。「君をねんじて」の「熱き」想いは、竹に添つて立ちのぼる、おそらくは焚き火の煙であろう煙そのものと化して空に広がり行く。その時「けぶり」はもはや対象ではなく、作者内面の「熱きもの」それ自体のイメージに転ずるのである。あるいは

手に触るれど冬木の幹は青からず

その指はただに冷えたり

さしのぼる煙のなか

消えむとするみじめなるわれなるか

はりがねのごとき草の鳴る中

そのうちにわれの消えゆく音あり（煙れる冬木）

にあつては、冬に閉ざされて寒々と凍てつく生命の意識が、「みじめなるわれ」という現実生活の痛みや悲しみを伴ないつゝ、「煙」となり「音」となり「消」えるという形で対象に同化される。冬という季節の訪れを全感覚を以て受け止め、それを「みじめなるわれ」の心情と一体化し、生の意識の次元で捉えた時、「消えむとするわれ」「われの消えゆく音」という極めて生々しい表現が生まれるのである。「もえよ／木の芽のうすみどり」（ふるさと）や「あんずよ花着け／あんずよ燃えよ」（小景異情 その六）などの一見何の変哲もない詩句が、一編の詩の中に置かれた時不思議な迫力を持ち得るのも、こうした対象（自然）の血肉化があるからだと言える。

「心配であへぐ気持で見る樹々や山々は、美しいとか慰めとかいふ好尚の感情ではなく、何となくそれらの風景が気持と同様の弱り方で心に填り込むのだつた。十年後の自分の詩作に役立ったものは、その折の填り込んだ樹々や山々の相貌であつた。」

とは後年「弄獅子」に説く所であるが、この「風景が気持と同様の弱り方で心に填り込む」ないしは「自然に近づいて行くその中にはひり込んでゐる」（弄獅子）という独得の自然の把握こそ、彼が少年時に故郷金沢の自然と直に向き合つた生活の中で獲得した方法であつた。『抒情小曲集』の詩法はこの自然・対象の血肉化の方法を深めたところに成立したのであり、同集のテーマを集約した形象とも言うべき「緑」と「青き魚」のイメージもこの方法の延長上にあると私は見る。

勿論犀星独自のこうした詩法が、初期の散文や俳句・短歌にそのまゝ認められるということではない。「万樹みな」の歌では表現は明らかに未だ

比喩の域にとどまり対象の血肉化は行なわれていない。しかし自然の情感を自己の想念に同化しようとする方向は既に示されている。また『小曲集』とその周辺には春を迎える歓びの詩や明るく高揚する心象を春の草木のイメージに託した作品が多く（「ふるさと」「小景異情 その六」もこの類である）、これは長い間雪に閉じ込められる北国の風土と無関係であり得ないものだが（「河辺の初春」に既にそれが見えた）、そうした詩情もこの歌にのみ取れる。これとは逆に秋や冬の訪れは、逆境によって閉ざされている彼の生活意識をますます暗く重苦しく圧迫するものとして、おそれとおのゝきを以て迎え入れられる「煙れる冬木」の「消えむとするみじめなるわれ」「そのうちにわれの消えゆく音」が季節感と生の意識との関連から生まれた詩句であるとはその意味なのであり、「わかれ」の「もはや別れなり／くらくして寒い冬がくるぞよ」という怯えにも似たつぶやきもまた、そうした自然の受け止め方を示すのである。右三首の歌の中で、「秋の樹々」がみな「われに憂き冷たき」と感ぜられ、裏葉に「悲しみの色」をそめてゐる所以もそこにある。そして「さらさら」との歌で、「棕櫚の葉鳴り」を「わが悲しみのいと低きうた」と聞き、「われに憂き」の歌で、秋の樹木の紅葉した色をわが「悲しみの色」と見なすこの発想は、「煙れる冬木」の「さしのぼる煙のなか／消えむとするみじめなるわれなるか」や「はりがねのごとき草の鳴る中／そのうちにわれの消えゆく音あり」と全く同型のもので、私にとつてはこれらの短歌は単なる感傷的自然詠でなく、『抒情小曲集』の詩法との関連に於いて特別の意味を持つ。

後年犀星は

わが宿はまごめのさとの

藪なかに

灯ひとつ点れ

さぶとは思はず。

のような四行詩形式の短歌を試みた。「犀星詩歌集」の副題を持つ『十返花』（昭11・2刊）に収められた数十首を含めて、八十九首が非凡閣全集に入っている。が、それは作家として名を成した後の作で、生涯を通して短歌の製作はさ程多くはなかつたようである。

四 詩

明治四十年七月から四十二年五月にかけて、犀星は二十三編の詩を「新声」「文庫」(「文庫」には二編のみ。他は全て「新声」)に投じた。こゝから『抒情小曲集』時代に入る四十五年十月(「スバル」発表の「青き魚を釣る人」他三編)にいたる期間に、犀星の名で発表された詩は「尼寺の記憶」(「スバル」明43・2)・「夏のをほり」「ベットに入る前の舞踏」(「創作」明44・10)の三編のみで、他には「薬事評論」に神谷の名で書いた十数編があるだけである。

ところで犀星は、昭和八年二月、椎の木社から初期詩編十四編を収めて『十九春詩集』を編みこれを世に送った。同集はその「あとがき」に

「十九春詩集とは十九のとしに書きたる意味也。いかに拙いかに呆れるばかりなれど、玆にとりまとめ置く。斎藤昌三氏蔵本雑誌『新声』より抜萃。」

とあるとおり、右の初期二十三編のうちの「新声」掲載の諸作から選び、これに大幅な削除・改訂ないしは改題を施して編集したものである。「十九のとしに書きたる」は厳密には数え年十九のとしから二十一までの約二年間ということになる。

(1) 明治四十年七月号「新声」の新体詩欄に、選者児玉花外によつて犀星の記念すべき最初の投稿詩「さくら石斑魚に添えて」が載せられた。この四十年という年は、「明星」「文庫」の浪漫主義が衰退し、小説界の自然主義運動が詩壇にも波及して、現実生活の苦痛・倦怠・厭惡等の意識を如何に表現するかが最大の関心事になりつゝあつた時である。三月の早稲田詩社の結成、六月の「詩人」創刊、九月の川路柳虹の「塵溜」を含む「新詩四章」の発表などが主なる詩史的現象であり、実作では有明の古典的象徴詩の完成を見る一方、白秋・露風ら新勢力の台頭も目覚ましかつた。とは言え、地方にあつてはじめて詩作に手を染めた犀星が、こうした詩壇の動きを正確に理解し、時代の先端を行く詩風を成すことは勿論無理である。彼の詩作は先づ文庫派の新体詩を学ぶことから始められた。

さくらうぐひにそへて

巖をつたふ点滴の
藤のむらさき錆びはてし

み山の奥のうぐひすの
そこにしづみし声あらば
みづ苔あさきうつる戸に
あかき鱗をば掻きたてつ

さくら石斑魚も春ならむ。
水なき里の乾土に

粉米のはなの散りしきし、

妹がゆうべをまゐらせむ。

さくらうぐひは美しきものを。(詩集本文)

言うまでもなくこの詩は、冒頭から七行目までに、谷川に春を迎えた魚の姿を写し、以下四行でその魚を捕え「妹」が夕餉に送らんと歌つたもので、標題「さくらうぐひにそへて」も魚に添えて少女に送る詩という程の意味である。そして、こうした素朴な発想とロマンチズムとは、七五の正調や古風な用語と相俟つてこの詩を文庫派の田園浪漫詩に著しく近づけている。おそらくは「横瀬夜雨や蒲原有明、薄田泣菫などの詩集に、『天地有情』といふ土井晩翠の詩集などがおもな書物であつた。」(泥雀の歌)、あるいは「子守唄のやうに優しい横瀬夜雨の詩にのみ耽つた。」(泥雀の歌)というその横瀬夜雨あたりに倣つた詩風であつて、彼の詩業の上からは、文庫派の感化のもとにその詩的出発がなされたこと、および先の犀星の春の訪れへの歎びや小動物に寄せる興味をこゝに認めれば事は足りるであらう。これを「いろ青き魚」のイメージと重ね合わせ、「片田舎で春を迎え野望を抱き淵から脱出しようとする心情」(注5)まで読み取ろうとするのはいさゝか深読みと言ふべきで、『小曲集』の「青き魚」とこの詩の「魚」とはまた異質のものである。なお詩集本文の「粉米のはなの散りしきし、／妹がゆうべをまゐらせん。」は文脈に無理があり、為に意味の明瞭を欠くが、初出詩にはこの間に素直な叙述が入り、また初出は内容上前半八行と後半八行にきつかりと分けられた十六行の詩、より形式の整つた作品であつた。ちなみに右の詩は新体詩欄の第四番目に掲載されてい

るものであつて世に言われるように首位に推された作品ではない。約一年後、「新声」四十一年十月の「五位は啼く」が犀星の投稿詩としてはじめて第一位に入選した作品である。

(2) 次に四十年十一月発表の「むしうりのうた」は

あはれ加賀富士、高尾山

霧がつづたいくさむらで

はじく小腸のてざわりも

露もろともにつかまへた。(詩集本文)

にはじまる口語体俗謡詩で、犀星としてはこの種の試みのおそらく唯一のものである。周知のように純粹な口語詩は川路柳虹の「塵溜」(「詩人」明40・9)に起り、四十一年五月「早稲田文学」の御風「瘦犬」・露風「暗い扉」に於いて本格的試みがなされた。が、俗謡体口語詩にはこれ以前に夜雨の「お才」の名作があり、野口雨情は民謡詩集『枯草』(明38・3)を既に出していた。四十年前後にあつても、雨情に「田甫小唄」(「文章世界」明40・6)・「地唐白歌」(「中央公論」明40・7)・「豆畑唄」(「ハガキ文学」明40・7)、夜雨に「露」(「新声」明40・9)、泡鳴に「端唄」(「新声」明41・1)「趣味」明41・1)、汪洋に「新謡」(「ハガキ文学」明41・3)等の作を見、「ハガキ文学」は四十一年五月に「新俗謡欄」(桑田春風選)を、「新潮」は四十一年三月に「俚謡欄」(平井晩村選)を設けてこれを募つた。詩壇の一角に俗謡体詩がある確かな位置を占めていたのは明らかであり、犀星の右の詩もこうした傾向を追うものであつたと思われる。内容的には特に見るべきはなく、例の『抒情小曲集』の小動物への愛着を示す詩編、あるいは

麦のみどりをついで出て

ついでともどれば雪がふり(木の芽)

かもめ、かもめ

入日のかたにぬれそぼち

びよろとなくはかもめどり(かもめ)

といった、詩と歌謡の中間にあつて新鮮な抒情を可能にした文体を考え合

わせる時、多少の興味を起こさせるに止まる。もつとも、『小曲集』の主要な部分へ一部へ二部へが、都会生活ともまたそれを背景とする当時流行の都会的享楽詩とも殆ど無縁の、土着の抒情(故郷の自然と向かい合つた詩人の孤独な魂が生んだ)とでも呼ぶべきものによつて成り立つてゐること——そのことを考慮するならば以下に触れる象徴詩などよりも「さくらうぐひ」や「むしうりのうた」の方がはるかに犀星らしい発想を示していると言えるのかもしれない。

(3) 以上二作はおゝむね文庫派系統の流れを汲み、その素朴な作風は象徴詩以前の新体詩の領域に属するものであつた。これに対し四十一年以後の作品には詩想・用語・技法等に象徴詩の歴然たる感化を示す作品が多く見られる。先ず詩集に「愛の日」として収められた四行詩

愛の日

わが胸にうつり

きみはも、みいらとなりぬ。

あはれ愛の木の芽は

見よ 胸にたかなるくるしさよ(詩集本文)

は、詩集本文で見える限り「きみはも、みいらとなりぬ。」のいさゝか唐突な比喻を含みつつも、恋愛感情の高ぶりを主題とした単純な抒情詩である(「新声」明40・7の短歌に「わが胸に木乃伊となりし影溶けて病はいえぬはつ夏のまど」がある)。この詩の初出は標題「死の日」、恋人の面影が「胸の鏡」に映ることによつて「暗愁の戸に／囚はれし」魂が生き生きと蘇る、そこに「安」をのろふ醜なる影」が現われて「なつかしき鏡の影」を奪い去り、わが魂は「醜なる影」と戦つて敗れる、というかなり複雑な内容を象徴的に表わした長詩(全四連三十二行)であつた。沈滞した魂が恋愛によつて救われようとしたにも拘らず、その愛の対象が何らかの理由によつて遠ざけられた苦しみを歌つた、と詩は読み取れる。こうした精神の葛藤を一つの内面のドラマとして表象するのは有明の象徴詩などによく見られる方法であり、あるいは犀星も有明あたりに学ぶところがあつたかと想像される。少くとも「胸」を「鏡」に喩え、そこに恋人の面影を映すといった表現の方法は、「心」を「池」(月しろ)や一つの「部屋」(茉莉花・癡

夢)や「壁」(滅の香)になぞらえて心象風景を展開する有明得意の手法と同じもの、また「暗窓の戸に／囚はれし蒼なる魂」や、終句

「生」は日に亡びゆくこと

脈搏はうごくもたゆげ

刻々に「死」の日近づく。(初出本文)

などは、明らかに象徴派流の近代世紀末精神の表象を意図している。勿論当時の犀星が象徴詩をその精神にまで遡って理解したとは到底思われな。い。「蒲原有明の詩などはいくら読んで分らず、しまひに分らないために嫌ひになつたほどだつた。」(泥雀の歌)というのが偽りのないところであつたろう。年少の街氣が当時流行の象徴詩風に追隨させ、生活意識としての青年期の悩みが近代頽唐の精神の外形を装つて表現された、というのが事実になつたに相違ない。それはともかくとして、この他にも「胸の日の暮」、および「わが心」の原作「心の風」なども明らかに象徴詩を志向して居り、「胸の日の暮」という標題も有明の「苦惱」(『有明集』所収)の一節「影深き胸の黄昏、密室の戸は鎖しもせめ」あたりに出たかと推定されるのである。「心の風」で彼は、人皆眠りに沈む夜の闇に、乱れ箱の中、よもすがら「巻絵のをみなを囓る」風を歌い、それを「わが哀しびの現形のねずみ」と呼ぶ。この意味は、表現の稚拙さもあつて作品のみでは把握難いが、小説「抒情詩時代」の

「私は、そのころ実際の女の人よりも、絵にある女の私が私の心に近いものであつた。私は烈しい情欲に頭へながら、絵画の女の腕や脛に、吸ひ入るような接吻をしたものであつた。」

と照し合わせるならばもはや明瞭である。青年期の情欲の衝動を暗示したのが「心の風」だつたのである。

こうした象徴詩の感化は、これら純粹に象徴詩を意図した作品以外にも見え、例えば四十一年七月発表の「地震きたる」の終連

かかるときもただむき捲きて、

ほほと笑めりきみとわれ、

あざけりうかべ地震をきく。(詩集本文)

の官能への感溺や、「春の夜の」の

暖炉のぬくみちし室ぬちに
情げなる時計のおとのちくたくと。

肌しろきもでるのをみな、

俯むきてはにかむけはひ、立ちあがる。(詩集本文)

の頽廃的情緒も、同じく象徴派流の官能詩に学んだ。もつとも詩集の「春の夜の」は、一種の倦怠感をモチーフとする気分詩であるが、原作「モデル」はモデルに向う若い画家の激しい性欲を主題とした作品で、こゝにも犀星青年期の欲情に悩む姿が示されている。そしてこれら性欲的な官能的要素は、勿論その表現のスタイルこそ異なれ、詩では例えば「青き魚を釣る人」の「春の寺」や『鳥雀集』の「唾」「足」に、小説では「性に眼覚める頃」をはじめとする犀星特有の官能的文学に、引き継がれ展開して行くことになる。

(4) 犀星の文学的生涯を水脈のように流れる母恋いの情については、これまでに数々の犀星論が取り上げて来た。小説「幼年時代」に少年の心を通した生母への追懐が抒情的に歌われ、以後彼の描く女人像に、想像をも交えてふくらんだ母のイメージが重なっていること、多くの作品の示すところである。詩に限って言えば勿論その文学様式の制約もあり、こうした心情を直接テーマとした作品は殆どない。母恋いの情は、彼の宿命のようにその精神に根を下ろした孤独や哀傷の一部をなすものとして、抒情詩の根底に横たわつて見ると見るのが妥当であろう。強いて言えば『愛の詩集』あたりの娼婦を歌つた詩に、「罪と罰」のソーニャと生母の面影が投影していることと見られる節があるが、これもさ程顕著なものではない。この母を恋う心情を直接に吐露した抒情詩として、『十九春詩集』の「女」はある意味での興味ある作品と言えるかもしれぬ。先ず詩集の「女」は

女

わすれえぬをみなよ、

はなやぐ声の

母おやときくからに悲しまる、

わがかみなでつ

やさしきことを言ひたまふ。(詩集本文)

というもので、「わがかみなでつ／やさしきことを言ひたまふ」た、我が幼少時の母の声を追想した詩とも、または愛人である女性に母の声を聞き、そのやさしさに甘える感傷を歌った詩とも、いずれにも解され、それだけに母恋いのテーマは幾分弱められる結果になっている。ところで原作は標題「母」、この方は

忘れ得ず

円顔の眉の痕の青

隠れし皺の若き色。

……………

鉄漿くろき齒を剥きてぞえまふ。(初出本文)

という生々しい描写を含み、より直截に主題を打ち出した詩であつた。この「円顔の眉の痕の青」は、「幼年時代」の冒頭「母は眉の痕の青青した四十代の色の白い人であつた。」とある記憶に、また「隠れし皺の若き色」は、「弄獅子」の「僕はそんな若い母の額にふしぎに皺のあつたことを覚えてゐた。」にそれぞれ照応し、この詩が実感に忠実に書かれていることが裏付けられるのである。六・七歳の頃、養家から数丁離れた実家に継母の眼を盗んで生母に会いに行つた追憶を犀星は書いている。それはたった二・三度の体験に過ぎなかつたが、その時見た、日当りの良い果樹の畑で働く実の父母の姿は、強く彼の眼に焼きついた。「幼年時代」冒頭の描写はその折の記憶を元になされたもので、詩「母」もまた同じ印象に基づいて書かれたと推定される。こゝには感覚を通しての犀星特有の驚くべき記憶力が生きているのみでなく、時には生母への追懷に涙ぐんだであろうその青春の姿が、鮮やかに示されてもいるのである。

(5) 次に、詩集には収められていないが犀星の口語自由詩を簡単に見ておきたい。四十一年八月十五日号「文庫」に、犀星は「淋しい」「街頭」の二編の口語詩を発表した。その一つは「文庫」同号に同時に発表した短歌

さらさらと棕櫚の葉鳴りにつたひゆくわが悲しみのいと低きうたと同じモチーフを、形式を詩に変えて

淋しい

夢のやうな夜である。

熱くなつた手を、頬にあてゝ見ると急に淋しくなつた。

ぼつとした影が

ほゝゑんですうと消えた。

何だらう。

窓の棕櫚がさらさらと鳴る

風が出たらしい。

あゝ淋しい。

としたもの、今一つは

街頭

今日もまた逢つた。

蒼い顔の、眼のくぼんだ

見るからに病氣があるらしい。

力なく弁当を携つた指が

白くほそい、鉛でも額につけられた様に

俯向いてゆく。

するどい神経が眉と眉とをせばめて

誰でもながし目に

睨む癖がある。

厭な奴だ、渠に逢ふと

胸が圧されるやうで

あとまで苦しい。

というものでこの方は発想のヒントを御風の「瘦犬」に得て成つた。「瘦

犬」の「あゝ厭な奴だ、気味の悪い奴だ。」をそのまゝ借り来つたあたりはいかにも稚いが、詩を書き始めて約一年、漸く詩壇の動きにも敏感に反応している点が興味深い。口語自由詩は柳虹の「塵溜」（「詩人」明40・9）に端を発し、四十一年に入つての様々な論争を背景に御風の「瘦犬」、露風の「暗い扉」（共に「早稲田文学」明41・5）によつて俄かに勢力を得、「文庫」同年五月十五日号には投稿家の中にいち早くこれを真似る者があり、「紅炎」「秀才文壇」「ハガキ文学」等の各誌は口語詩欄を設け、その年の終り頃には「口語詩が殆ど全詩界の半ばを領するに至つた」（注6）のであつたが、犀星もまたこの動きにつこうとしたのである。これも習作期に於ける模索的試みの一つであつた。

以上は『十九春詩集』と周辺の注目すべき幾つかの作品について述べた。最後にこれらの詩の形式の問題に触れておかねばならない。詩集で見る『十九春詩集』の諸編は、その大部分が五行ないし六行から成る短唱である。更に短い三行詩・四行詩を含み、俗謡体「むしうりのうた」の三連十一行を最も長いものとする。このことは当然後の『抒情小曲集』とその前後の詩風を想起させ、あの犀星独自の小曲スタイルが習作期において既に成立していたかとの誤解を招きがちである。詩史的に見れば小曲抒情には早く『於母影』の「花薔薇」あたりを先駆として『海潮音』の「わすれなぐさ」「白楊」「故国」等の事例があり、その後も白秋の「空に真赤な」（明41・5）をはじめとする諸編、吉井勇の全て六行詩のみを集めた「小曲十篇」（「趣味」明41・3）、同じく五行詩のみの「小曲拾篇」（「中央公論」明41・3）等の試みがあつて、その伝統は四十一・二年頃にも受けつがれていた。犀星の習作に小曲・短唱の類があつたとしてもさ程異とするには足りない。だが『小曲集』以前に、この詩人が詩集の統一的なスタイルとしての、あるいは個有の抒情形式としての短唱を確立していたとするならば、明治四十一・二年という時代からしてそれはやはり奇異な現象と言わざるを得ない。小曲の伝統は受けつがれていたとは言え、これを意識的に自己の抒情を託すべき主要な方法として選び、この方法に詩的生命をあずけた詩人が、「断章」の白秋以外にあつたとは思えぬからである。

この疑問は詩集本文を初出のそれと比較することによって直ちに氷解する。即ち『十九春詩集』十四編のうち、ほど初出詩に近い形のまゝ収録されたのは「さくらうぐひにそへて」「地震きたる」「針」「夜のしづく」の四編のみ、原作も短唱形式で書かれているのは三行詩「針」（原作も三行）、六行詩「夜のしづく」（原作も六行）ぐらいであること、その他は大幅な削除・圧縮によつて後から短唱に改めたものであること、を我々は知る。中には「天日」「風」「胸の日の暮」の如く、何連から成る詩の第一連のみを独立させて一編とした極端な例も見受けられるのである。

こうした大幅な改作は、当然のことながら時にそのテーマの変更をも余儀なくさせる。先の「愛の日」「春の夜の」なども、改作によつて、前者は愛の対象を失つた虚脱感や苦悩という主題から愛の感情の昂揚という主題へ、後者は性欲の衝動が単なる官能的情緒に、というようにそれぞれテーマを変えられたものである。その他にも例えば

たぐれし肺を

抱かるゝまゝに

君としゆけば（初出本文）

という恋愛の一齣を含む初出「薔の枯るゝ日」は、詩集では第一連だけが独立し

風

くらき薔の奥

ざわざわと風はかなしむ、

いづこよりわたりし風か、

ひもすがら音を立てぬ。（詩集本文）

となつて感傷的な風景詩に姿を変え、

わが瞳はこのとき

吸はるゝごとく不安のけはひ

瞞れば。（初出本文）

という灰色の不安を主題としていた原作「灰色」は

考へる虫

虫は這へり、

灰いろのしめれる壁に
いとゆるやかにかけをひき。

窓のそとなる秋風に

羽根立てぬ虫のころは。(詩集本文)

となつて即興的写生詩の傾向を前面に出す。「天日」「風」「胸の日の暮」はいずれも原作は恋愛感情を含んでいたのが詩集ではそれが失われ、逆に

針

しろがねの 神経の針の尖こそ

きらめき亘れ、空漠とふるゝものなき

無窮りなき 宙なるころろ(初出本文)

という空虚感を主題としていた初出「針」は、詩集では形の上では同じ三行詩でも

針

しろがねの神経の針のさきこそ

きらめきわたれ

きみがうへ。(詩集本文)

の恋愛短唱に一変する。詩集の「わが心」などは、原作の象徴詩「心の風」と全く異つた作品に変貌し、殆どその原形を留めていない。

右のような甚しい改作を行つたのは、思うにさ程深い理由があつてのことではない。昭和八年、四十歳を過ぎた彼が、かつて投稿詩人であつた頃のこれらの作品を読み返した時、「いかに拙いかに呆れるばかり」と感じたのは偽りのないところであつたろうし、にも拘らず己が青春を記念するこれら習作への愛着から一卷の詩集を編むとすれば、その古めかしさや拙なさを補うべく大幅に手を加える他はなかつた。その時、それまでの彼の詩集で最も評価が高く、創作の時期もそれ程隔つていない『抒情小曲集』の詩風に近づけることを思つたとしても、それは自然な事の成り行きであつた。詩集に収めるに当り、難解な象徴的表現は意識的に切り捨てられ、「愛の日」「春の夜の」「針」「考へる虫」「煙草」「わが心」等に見られるように、原作の、苦悩・性欲・空虚感・倦怠感・不安といった四十年前後の一般的傾向であつた深刻なテーマは、柔らげられあるいは変更され

て、詩集ではより素朴な感傷性・抒情性を表面に打出す結果になつた——これもおそらくは右の理由によるのである。

かくして犀星の初期習作詩は初出本文によらない限り正確にその傾向と特質とを把握し難いことになるが、初出詩によれば『十九春詩集』時代の詩は、恋愛ないしそれにかゝわる心情を歌つた「愛の日」(原題「死の日」)・「天日」(原題「美人草」)・「風」(原題「藪の枯るゝ日」)・「胸の日の暮」、性欲や官能への惑溺を主題とした「春の夜の」(原題「モデル」)・「地震きたる」・「わが心」(原題「心の風」)、不安・空虚・倦怠等の青年期の心のありようを示す「針」・「考へる虫」(原題「灰色」)・「煙草」(原題「煙草のおもひ」)、母恋いの情から出た「女」(原題「母」)、小動物への愛着から生れた「さくらうぐひにそへて」(原題「さくら石斑魚に添えて」)・「むしうりのうた」——こうした様々な内容を含む。またその詩体から言えば(これも原作について言う)、文庫調新体詩風「さくらうぐひにそへて」あり、俗語体「むしうりのうた」あり、象徴詩「愛の日」・「胸の日の暮」・「わが心」あり、象徴派流官能詩「春の夜の」・「地震きたる」あり、短編小曲「針」・「夜のしづく」あり、更には口語自由詩「淋しい」・「街頭」ありで、これまた一定の方向を持たない。これらは『十九春詩集』とその周辺の詩が文字通り習作期の産物であつて、形式・内容共に未だ統一的、かつ個性的なスタイルに到達していないこと、換言すれば同時代の作品は個有のスタイルに至るまでの様々な模索の試みの結果であつたこと、を証するのである。文庫派から象徴詩・口語自由詩あたりまでの詩史の流れを、四十年から四十二年にかけての習作に於いて犀星もまたたどつた。詩人が独自の領域を開拓するまでには、前時代の模倣から入り、前時代の文学を体験しなければならぬという極めて当然の過程を、犀星もまた踏んだのである。「北原白秋の抒情小曲の成熟期を明治四十一年に見た。これに対して室生犀星の初期小曲は意外にはやく明治四十二年の制作だつた。初期制作とはいふものの室生犀星のそれらの作品は、最初からはつきりとしたまとまりを見せていた。」(伊藤信吉『抒情小曲論』)といつた犀星小曲に関する論が誤りであること、右によつて明らかな筈である。『抒情小曲集』の独創に達するまでには、この四十二年の時点から

さらに三年を経て、四十五年十月まで待たなければならなかったのである。(注7)

注1 犀星自身のことば。新保千代子氏『室生犀星―ききがき抄』による。

2 「季刊芸術」3号 奥野健男氏「青き魚―室生犀星の詩的故郷」

3 新保氏によれば、この句はこれ以前四十年に一度「北国新聞」にも発表されているという。

4 このメダルの話は『青き魚を釣る人』にも書かれている。

5 奥野健男氏。2に同じ。

6 「早稲田文学」明41・12 「前月文芸史」

7 「東北学院大学紀要」久保忠夫氏「犀星の「寂しき春」」に正しい指摘がある。

後記

本稿および資料「『十九春詩集』初出本文」を成すに当つては、昭和女子大近代文庫・日本近代文学館・国会図書館・日本大学文理学部図書館等のお世話になった。記して感謝申し上げたい。

資料紹介・『十九春詩集』初出本文

〔注記〕 本論でも触れたように『十九春詩集』所収の十四編の詩は、詩集収録に当って、『抒情小曲集』スタイルに近づけようとする意図があつたのか、大幅に改作されている。中には殆ど別作と見られるほど改作の甚しいものがあり、雑誌初出の本文によらない限り犀星習作期の詩風は充分把握できない。

また本論中「四 詩」に関する私の記述も初出本文を土台としたものである関係上、参照の便宜のためにもこれを紹介しておくことにした。方法は次のとおりである。

(1) 詩集で各作品の後に記された作者自注の発表年月は、左の誤りがあるのでこれを訂正した。

「考へる虫」

(四十一年九月) ↓ (四十一年七月)

「煙 草」

(四十二年三月) ↓ (四十二年一月)

「わが心」

(四十二年五月) ↓ (四十一年九月)

(2) 詩集収録に当って改題された場合には(一)で初出の標題を示した。

(3) 漢字は旧字体を新字体に改めた。初出の傍点等は省いたが、句読点・ルビは元のまゝとした。

(4) 発表誌はすべて「新声」である。

さくらうぐひにそへて(さくら石斑魚に添えて)

蘭をつたへる点滴の
岩罅ふ藤のむらさきに
触れては淵の藍濃く
老ひ叱りたる鶯の
底に沈みし声あらば
水苔青きうつる戸に
唐紅き小鰭を掻きたてゝ
さくら石斑魚も歌あらむ。
はげし塗籠の朽ちたるを
笹の緑に覆して
水なき里の乾土に
粉米の花の散りしきて
蟻這ひのほる竹椽に
白き腕の妹が
拙な手並庖丁に
怖つる夕を参らせむ

(四十年七月)

むしうりのうた

あれは加賀富士

高尾山

霧が冷たい

叢で

蛇を怖れぬ

乃公だもの

茄子の餌ぐさは

莫からうが

はじく小脇の
掌触りに
露もろともに
つかまへた。

秋のはじめに
空の藍
醸れて咲いた
草あやめ
岩魚の尾籠の
鈴むしに
水で濡いて
入れてやれば
すね可憐や
みんなして
明日は都の
何処で鳴く。

「楨に朱塗の
籠吊つた
ちいさい庭の
嬢さんが
茄子を剪ろうも
草子箱の
上で弄品の
庖丁が
こつて白い
指さきを
萩のはつ花
紅くした。

これさお前つちや

別々に

あすは一疋に

一つ籠

薄の露が

恋しいなら

ほそい格子の

片戸を啓けて

淋しかつたら

逃げて来い。」

(四十年十一月)

愛の日(死の日)

現々とすゝみくる影

静やけさ胸の鏡に

さとうつり木伊乃となりぬ

うら枯れし愛の樹の芽は

みづみづしみどりを萌し

酒のごと精の香を吐く。

いく月を暗愁の戸に

囚はれし蒼なる魂は

けふもまた隋眠にふける

かゝる時戸を漏る光

まぶやかににぶき眼を射る

起きぬはた醒めぬよろよろと。

よき影の鏡ををマヤおほぎ

わが魂は復び活きぬ

見よ胸にたかなる愛の

くしき、はたやさしきひゞき

わが眼のばみにひかり

丘の上に沈む日を見る。

「安」をのろふ醜なる影は

げらげらとたかあざわらひ

なつかしき鏡の影を

ひと抱え、うばひて立ちぬ

憤然と魂はやらじと

たゝかへどぐざと刺したる

何の刃、貫きさりぬ

滾々とくろ血にあえぎ

僵れたる魂はふたゝび

たゝざりき復むらさきに

脹れたぶれくるしみに唸ぐ

「生」は日に亡びゆくごと

脈搏はうごくもたゆげ

刻々に「死」の日近づく。

(四十一年二月)

注 第四連第七行までで連が切れる方が

自然と思うが、今は原文に従う。

春の夜の(モデル)

暖炉ストーブのぬくるみ満ちし室ぬちに

惰げなる時計のおもものちくたくも。

油絵の貴なる肌に吸はるごと

二時を指す、たゞほそく細やかに。

肌しろきモデルのをみなやとはれて

俯むきてはにかむけはひ、立ちあがる。

ふとりたる女を蹟め忙しげ

はしりゆく紙の上なる円き形。

息のみて胸にあらはの脈搏は

春の夜のさぶなみのごとあらめきて。

乳房の影はかくれぬはづかしき

脇下のくる髪そよるそよなる。

した腹のふくれ、まろらに何ゆめむ

あからめる臍は汗して縮る。

わかうどの凝然たる眼は鋭けく

豊肉ゆたかしの足股あまたに注ぐ、あな今し。

もだしなる女をなは有繋さすがにはゝと笑む

芸術は描えなりぬわかうどの眼は盪々どうどうと。

艶めける肉を欲りして、ひたぶるに

接近アップりぬ、飢えしけもの、醜ささまの姿。

(四十一年四月)

針

しろがねの 神経の針の尖こそ

きらめき亘れ、空漠とふるゝものなき

無窮りなき 宙なるころ

(四十一年七月)

地震きたる

地震きたる、はるかの遠に
鳴りどよむ ひどきの空は
たゞ灰いろに 低し。

樹のうめき 地のなげかひ
火のばらのほのほぞ起れ
市のまなかに。

かゝるときしもたゞむき捲きて
ほゝえめり、きみとわれ
あざけるごとく 地震をきく。

(四十一年七月)

天日 (美人草)

わだつみのふかき底へに
あゝ天日の
かなしみ澱む、日日あらば。

美人草のあせたる唇に
つめたく醒めし
肌に泣かむかも。

たゞ大安のけふの日に見る
くろ髪の
君よ、手を把れ、わが熱の華。

(四十一年八月)

風 (藪の枯るゝ日)

あゝ暗らき
暗さ藪の奥
ざわざわと風はかなしむ。

たゞれし肺を
抱かるゝまゝに
君としゆけば。

土の底へに
みたるに悲しみの影
胸に脈うつ。

藪はいまおとろへの
やつれし手をあげて
蒼そらを、抱きぬ、くるほしげに、

(四十一年八月)

考へる虫 (灰色)

虫々は這へり
灰色のしめれる壁にくらき影曳き
いと遅にしのぶごと。

わが瞳はこのとき
吸はるゝごとく不安のけはひ
瞶れば。

ざらざらと壁の砂
こぼれぬれ、窓のそとなる大風に
羽立てぬ、かの虫は。

あたかも胸は
ときめきの浪のたか鳴り臆心
にとろけり。

(四十一年七月)

胸の日の暮

憶ふとしも莫く浮ぶ灰色の想ひ出の
しろき埃の絃のなげかひ、
何ものか触れ鳴るあわれ胸の日の暮。

ふはふはと流れゆく古鐘の錆の
香に酔多るむね紅き蝙蝠の影
胸のうつぼの海の湖心にうつる。

いづらよりか盲人の船の櫓の軋り泣き
そが消え行く極に煌めく継子星
さびしちに眼を瞬けば泌みわたる

風の病つき。

あわれ盲ひたる人類の喜び哭き
遠近にさらされし女のむくろ
けものの爛るゝにほひ、四辺に漂ふ。

われはたゞ心安のたまゆらを
しろく澄みたる虚空の一角に
君がおもかげを描きぬ、白銀の国。

(四十一年一月)

煙草（煙草のおもひ）

あゝ今日も復た
喉を焼きゆく勁き煙草のほとぼしり
乾びたるこゝろのそこに
うづまきて腐れ漂ふ。

然れども醒めず
にこちんのくろき塊に
追憶の鎚を揮ひて噎びくるめく
あくどしきにはひの香炉に
われは眠りぬ、あゝけふもまた。

ほのにかびくる
しろき顔、青き顔、くろき顔
拮据いろなるけむりの裡に
裸形のひかり流る

なかにも美しき、えまひ さゝやき
飽かずつくづく眺めてあれば
金鞍鳴らして胸はとどろく。

あはれ悲しきたばこはつきて
うづだかき吸殻のみぞ冷やかに榎せたる
肌をさらせるものと
大脳のうめきもたかく
よこたはる、あにけふもまた

（四十二年一月）

女（母）

忘れ得ず
円顔の眉の痕の青
隠れし皺の若き色。

華やぐ声の
母ときくからになみだ流るゝ。

わが髪なでつ
鉄漿くろき齒を剥きてぞえまふ。

（四十二年三月）

夜のしづく

ふかき夜のしづくしたゝり
ふかき夜のさしぐみ流る
その底にしづくに目覚めて
にぶきつかれに
ひるの眼のおどろきに
餓ゑたる勁きちからぞせまる。

（四十二年五月）

わが心（心の風）

日輪の核の熱のいきれに育つ
わが哀しびの現形のねづみ
くらやみの熟めるなかにし迷ひ入り
よろばひ匍ひね闇魂のありかこそ

いづこはてなく沈みゆく、底のそこ
くるめくにほひ、さまきみだれ幽の香
たゞよもすがら、巻絵のをみなを噛る。

然はあれど闇の、疚きのほそき針
たまゆらを聞こそ蟹す、しくしくと。

生のあらゆるものはかゝる時しも
睡死の海の、ゆめの林に
青じろきむくろを曝す、夜もすがら。

あゝわが哀しびの心の風
くら闇の酬のにはひに噎び高き叫びに
はた青き淋しみにうち顫ふかゝるとき

（四十一年九月）